現在の日本文化財科学に加えられる問題点
― 今後の克服のために ―

小田　寛貴（名古屋大学理学部化学科）

＜はじめに＞

本報は，現在の日本文化財科学に加えられている問題点の克服に努めるための足がかりとして，その問題点のよって来る原因について考察したものである．

＜本論＞

自然科学という学問は，時間・空間的限定性の弱い ― 反復性を持ち得る ― 試料を対象とし，その対象から，「万人に妥当であるような真理」を引き出すことを目的としている．そのため原理的には，学者個々人によって真理が異なることはない．しかしながら，真理が一つの因果関係として統一されることはなく，数多くの因果関係がおのおの自己完結性を持つ事実として存在することになる．自然科学においては，この事実（因果関係）の集合の存在が真理であるということができる．

いずれの因果関係によっても説明され得ない事象が登場した場合，その事象は「経験則」という名を持つ一事実を真理の中において構成することになる．したがって，真理の中には，相互に対立する事実も含まれている．このことから，自然科学における真理は，常に内部に矛盾を抱えた事実の集合体としてとらえられるという性質を持つことになる．

文化財科学に加えられる問題点は，文化財科学とその周囲にある諸学問 ― 歴史学，および，その手段としての文献史学，考古学 ― との関係から生じる．したがって，この問題点について述べる前に，文化財科学と周囲の諸学問との関係を明確にしておく必要がある．

「歴史学とは何か」という問いかけ．これに対する答が仮にある探求者によって与えられたとしても，それは万人にとって妥当であるような真理とはなり得ない．なぜならば，この問いかけを行う探求者は，その問いかけを行う時点において歴史学者としての側面を持つからである．後述するように，歴史学者とは万人共通の真理を探求する存在ではないのである．したがって，歴史学に関する定義は，万人共通の真理として限定されることはない．我々は，歴史学の特徴の一つとして「歴史学とは，人間に関わる過去の再構成を目的とする学問である．」と述べることができるにすぎない．

ただし，このような歴史学の特徴は，歴史学の取り扱う対象に制限を加えることになる．人間の過去の再構成を目的の一つとする以上，ある特定の時に，特定の場所において生じた事象を素材に議論が展開されることになる．時間・空間について限定的な — 反復性のない — 個別具体的なもののみが，歴史学の対象となりうる．時間・空間について限定的な対象とそれを扱う学者との関係は，自然科学におけるそれとは明らかに異なる面をもっている．それは，歴史学における真理が，学者と不可分な対象から導き出されるという点である．時間・空間限定的な対象から導かれる事柄は，それを扱う学者の態度 — 対象への接し方 — によって異なりうる．すなわち，歴史学における対象は，学者個人の接し方に応じてその一側面を見せるうるが，学者個人なしでは存在し得ないものなのである．歴史学においては，真理と対象の間に媒介者としての学者個人の存在が不可欠である．

真理と対象とが一個人である学者と不可分なものである以上，歴史学における真理を指して，万人に妥当であるような真理であると述べることはできない．歴史学における真理とは，客観的な真理とは異なるものである．したがって，歴史学における真理について，媒介者である学者個々人に依存して変化するものであるということもできる．学者個々人が，歴史の一側面を「拡張性と蓋然性とをもつ因果関係」として把握するために，学者の数と同数の真理が存在することになる．

これらの真理は，相互に共通する部分を持ちうるが，一方においては真っ向から対立する部分を持っている．当然，この真理群の和集合をもって万人に妥当である真理とすることはできない．また，この真理群の共通部分をもって万人に妥当である真理とすることもできない．歴史学においては，学者個々人と不可分な数多くの真理 — 「拡張性と蓋然性とをもつ因果関係」 — が，相互に独自性を保ちつつ存在しているといえる．歴史学における真理は，万人に妥当なものとはなり得ないが，歴史学者個々人全体においては「拡張性と蓋然性とをもつ因果関係」が妥当な真理として存在しているのである．

いずれの歴史学者の因果関係にも見られなかったような事象が，歴史学の対象として登場した場合を考える．この新たなる対象に対して，歴史学者はそれぞれ固有の媒介者となり，固有の事柄を導き出しうることになる．歴史学者の媒介の仕方は，二つに分類できる．一つは，その新たなる事象を自分自身の因果関係（真理）に組み込むことを目的として媒介するものである．この媒介の仕方は，その事象の組み込みによって，自身の因果関係の正当性が損なわれない，ないしは強化されるような時に採られる．もう一方は，その事象を自身の因果関係の中に組み込まないことを目的として「媒介する」，すなわち，この新たなる事象を歴史学の対象として扱わないという「媒介」の仕方である．これは，その事象が自身の因果関係 — すなわち，真理 — と対立する際に採られるものである．

歴史学は，人間に関わる過去の再構成を目的とする側面を持つ目的学である．そのため，その中にこの目的の遂行を具体的に保障する手段が存在する．文献として入手できる史料を対象とする手段は文献史学，物質としての資料を対象とする手段は考古学と呼ばれる．この二つは，歴史学の範疇をこえず，その真理の存在形態も歴史学のそれと異ならない．

本来，文化財科学は，上述した二つの手段学と並ぶべきものである．文化財科学とは，自然科学的手法を用いて，対象としての試料から歴史学的な真理を導き出すものである．したがって，真理の存在形態は歴史学と異なることはなく，歴史学者個々人によって変化するものである．だだし，その真理（拡張性と蓋然性とをもつ因果関係）を構成する事象は，自然科学的手法によって導き出された事実である．この事実は反復の可能性を持ち，時間・空間について非限定的なものである．また，この事実は歴史学者個々人の取扱いかたによって変化するものでもない．

ここに，文化財科学に加えられる外来的問題点が生じる．歴史学における真理の存在形態は，学者個々人と不可分な数多くの真理 ―― 「拡張性と蓋然性とをもつ因果関係」 ―― が，相互に独自性を保ちつつ存在しているというものである．したがって，その真理を構成する事象も歴史学者個々人と不可分な関係にある．一方，文化財科学において，導き出された事実は歴史学者個々人から独立した一種普遍なるものである．歴史学者個々人と不可分な事象によって構成された真理のなかに，あらゆる歴史学者から独立な事実が一事象として登場することになる．歴史学における真理は歴史学者の数だけ存在する．したがって，その真理のいくつかにおいては，文化財科学によって導き出された事実と歴史学者個々人と不可分な事象とが矛盾なく因果関係を構成するに至る．この場合，文化財科学によって導き出された事実は，歴史学者個々人と不可分な事象の一つに転化することになる．しかし，またいくつかの真理においては，文化財科学によって導き出された事実と歴史学者個々人と不可分な事象とが背反することになる．夏島貝塚*)の^{14}C年代に対する評価が，日本旧石器時代の存在を認める考古学者と認めない考古学者とで全く異なったのはこの一例である．新たなる事象を自身の因果関係の中に組み込まないことを目的として媒介する「媒介」の仕方，この「媒介」の仕方を，歴史学者個々人から独立した一種普遍の事実に対して採ることはできない．文化財科学によって導き出される歴史学者個々人から独立した事実は，歴史学者個々人固有の真理を打破しうるものである．文化財科学によって導き出された事実を自身の真理 ―― 因果関係 ―― から排除するためには，歴史学者が文化財科学を一つの道具として扱う必要が生じる．測定器としての「文化財科学」から出される結果ならば，その結果の採用・非採用は歴史学者個々人にゆだねられる．ことに，非採用は測定器「文化財科学」の信頼性を疑うかたちでなされる．

現在，日本において文化財科学は，歴史学の一手段学ではなく，考古学ないしは文献史学の一つの道具（測定器）という立場に置かれている．また，文化財科学に内在する自然科学的な問題点は過大視され，測定器「文化財科学」の信頼性は漠然と問われているといってよかろう．

*)芹沢長介氏によって夏島貝塚の縄文早期の層から採取された木炭と貝殻の^{14}C年代が，ミシガン大学の測定によって，おのおの 9240±200[yBP]，9450±400[yBP]と発表された．これによると，縄文早期の土器は約九千年前に日本において作製されていたことになる．当時，日本の縄文文化は古くとも五千年前程度とされていたが，この結果は，それを大きくさかのぼるだけでなく，世界最古の土器が日本にあったということ示す．旧説を固持する山内清男氏は，^{14}C年代測定とは「八紘一宇思想」に結びつくものであるとして激しい批判を加え，芹沢長介氏との間に「論争」を展開した．

＜まとめにかえて＞

以上，文化財科学に加えられる問題点の寄って来る原因を自然科学と歴史学の真理の存在形態の相違に求めて，議論を展開した．文献史学者・考古学者が文化財科学に対して漠然と抱く懐疑の原因の一つは，文化財科学内在の自然科学的な問題点であるため，まず自然科学者がこの文化財科学内在の問題点を克服することが必要である．しかしながら，文化財科学に加えられる問題点の克服は歴史学者によって行われなければならない．当然，ここでいう歴史学者とは，考古学者，文献史学者，自然科学者から成る探求者である．

現実の「学問」世界において，考古学者・文献史学者と自然科学者との間にある障壁は，上述したような「理想的学者」── 本来あるべき学者 ── の間に生じるものばかりではない．この問題は，本論の流れから外れるものであるため，最後に本項において触れるにとどめた．

対象が探求者に提供しうる情報，この情報を正確に対象から引き出そうとする芸術的な試みを”科学”という．先に述べたとおり，自然科学と歴史学との間にある相違は，対象が探求者に提供しうる情報の性質 ── 時間・空間的限定性 ── の相違のみに基づくものである．しかし，大部分の日本の自然科学者は，現在においても，「科学＝自然科学」という発想をもっている．これは，自然科学がその性質上，日本の物質文明に貢献することが多かった点に起因する．すなわち，日本の物質文明およびそれを具体的に保障した自然科学を価値あるものとする自然科学者の思い上がりによって，「科学＝自然科学」という発想は形成されている．

また，現在の自然科学の研究において重視される点は，対象から引き出された真実そのものないしは実験結果という事実の蓄積ではなく，その研究の「オリジナリティー」・「話題性」なるものである．こういった風潮の中，自然科学的な対象から再構成された歴史は，自然環境の歴史そのものであるだけでは価値あるものとしてとらえられることはない．このため，自然環境の歴史はその範疇を越え，人間の歴史を規定するものとして論じられることがある．人間がそれ内在の論理に従って展開したはず

の歴史を，自然環境によって規定されたものであるとする — いいかえれば，人間の歴史的展開は，それ内在の偶然性によって形成されたものではなく，自然環境によって必然的に形成されたものであるとするような — 「悪しき環境決定論」が，ここに形成される．

対象が探求者に提供しうる情報，この情報を自身の研究業績となる形にして引き出そうとするような「非学者」と，「科学＝自然科学」という思想しか保持していない「自然科学者」とが横行する現在において，文化財科学が考古学・文献史学と対等，かつ相補的な関係をもつに至ることは容易ではないといえよう．